
魔法少女リリカルなのは、魔女の物語

SAKI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは、魔女の物語

【Nコード】

N3946N

【作者名】

SAK I

【あらすじ】

これは作者が詠子さんを好き過ぎて書いてしまいました。なのはと電撃文庫のMISSINGとのクロスオーバー小説です。なのはの世界で「魔女」十叶詠子が紡ぐ物語とは

無印からのスタートですが飛ぶかもしれません

一応ホラーなんですが多分怖くないです

誠に勝手ですが作者が受験の為更新停止します。 申し訳ございません

始まりの物語（前書き）

2011・11・8、

改訂と二話、出逢いの物語と結合

始まりの物語

ねえ、知ってる？

知ってる知ってるあの噂でしょう

そうそう、あの噂

なんでも知らない番号からかかってきた電話に出ると女の子の霊が出るらしいよ

怖いよね

キンコーンカーンコーン

やっヤバい授業はじまっちゃうよ

「あんな噂流して何が面白いんだろうね」

席についたまま少女達の噂を聞いていた金髪の少女は鬱陶しそうな声でそう言った

「にはは、仕方ないよ。アリサちゃん」

その言葉に栗毛の少女は苦笑しながらそう言った。彼女の名は高町なのは。この物語の主役になる筈の人間である

「でも何人かは見たって言ってるよ？」

もう一人の少女は心配そうにそう言った。そんな様子の友人に金髪の少女、アリサ・バニングスはやや呆れた様子で口を開いた

「あんなンデマよデマ。もしかしてすずか怖いの」

「ち、違うよアリサちゃん」

顔を真っ赤にしながらアタフタとする紫がかった髪の少女、月村すずかをみてなのはとアリサは笑いあった

「ユーノ君、ジュエルシードの反応ないの？」

夜中、高町　なのはは相棒のユーノ・スクライアにそう問いかけた子供が出歩く時間では全くない。断っておくがなのはが別に非行少女だとかそういう訳ではない。彼女は俗に言う優等生である

なら、何故こんな時間に外をふらついているのか……

その答えは事実は小説より奇なりを体现してるとしか言えなかった

……彼女は魔法少女なのである

「なのは、今日くらい別に休んでも良かったのに……さっきだって泣いてたし」

「ななは何を言ってるのユーノ君……私はなな泣いてなんかいないよ」

魔法少女モノ恒例のマスコット、フェレットのユーノの言葉になのははしどろもどろな口調になる……魔法少女と言っても普通の小学生。怖いものは怖いのだ

「だからって携帯の電源切ってまでも我慢しなくて良いんじゃないかな」

呆れながらなのは事を心配するユーノの言葉はとても正論であり
事実なのは足はガチガチと震えていた

しかしなのは持ち前の不屈の意志で立ち上がっていた

ピリリ、ピリリ

場の空気が止まった気がした

ピリリ、ピリリ

けれどもその音は止まる事なく鳴り続けた

「ユーノ君……悪い冗談は止めてよ……」

なのはは早鐘を打つ自分の心臓にせかされながらとなりにいるユーノに問いかける

ピリリリ、ピリリリ

「なのは、僕も冗談だっと思っていたいよ」

ユーノにも今起きている異常が理解できず完全にお手上げ状態である

ピリリリ、ピリリリ

なのはは恐る恐る音源と思われる自身の携帯に触れる

「ひゃっ」

ピリリリ、ピリリリ、ピリリリ

バイブレイターに驚きなのはが投げだした携帯は地面で揺れて光っていて今まさにその携帯に着信がある事を物語っている

ピリリリ、ピリリリ

「ユーノ君…冗談なら早く言ってね…魔法なんですよ…これ」

なのはは震えながらユーノに聞く。その顔は切に冗談だと言ってくれと物語っていた

ピリリリ、ピリリリ

「残念だけど魔法じゃないよ…なのは」

だけどユーノはこわばった風に否定の意を示しただけだった

ピリリリ、

ピリリリ、ピリリリ、ピリリリ、
ピリリリ、ピリリリ、ピリリリ、
ピリリリ、ピリリリ、ピリリリ、
ピリリリ、ピリリリ、ピリリリ、
ピリリリ、ピリリリ、ピリリリ、
ピリリリ、ピリリリ、ピリリリ、

着信音が煩くなり響く

なのはそれに吸い寄せられるようにその手を伸ばす

「やめるんだ、なのは」

それを止めようとするユーノの制止はなのはには聞こえてないらしく

ピッ

なのはは震える手で携帯を開き親指で通話ボタンを押し、携帯を耳に当てた

「もしもし……」

「こんばんは。『傷だらけの鋼』さん」

突然聞こえた透き通った声になのはの肩がビクンツと震える

それと同時になのはは急にまわりの音という音が遠くなった気がした
まるで世界から切りとられたみたいに

なのはは持っていた携帯が手から滑り落ちた。携帯を持っていた右手は不自然なほど湿っており、何かの禁断症状のように小刻みに震えていた

カシャン

携帯が地面に落ちたその音さえも遠く感じる。何かユーノ君が言っているけど聞こえない

今すぐにも逃げ出したいのに足に力が入らない

なのはは恐怖のあまりその場にへたり込んだ

「『傷だらけの鋼』さん、私はあなたとお話がしたいだけなんだよ」

なのはは聞こえてきたその声にぞっとする

別にアニメに出てくる悪役のようなおどろおどろしい声ではない

いたって普通の女性のような声だが、ただ何かが怖い

地面に落ちた携帯のディスプレイはまるで電源が切れているように何も映ってなく真っ黒である

つまり……その声は携帯を通じて聞こえたのではなく、それはなのは後ろから聞こえた事になる

怖い

恐い

こわい

しかしなのははその思いを持ち前の勇気を出して封じ込め振り返るしかしその時ユーノは思った

この場合必要なのは振り返る勇気ではなく振り返らない勇気なんじゃないかと……

「やっと顔が見れたよ。『傷だらけの鋼』さん。可愛い顔だね」

なのはが振り返るとそこにいたのは一人の少女だった。

いたって普通になのはに微笑みかける少女は年は自分の姉くらいでスラリとした多分可愛い部類に見える少女だった

一瞬拍子抜けすぎて気が抜けそうになるがその微笑みを見てなのはは抜けそうだった気を引き締め直した

彼女の笑みは全く邪気がなく悪意がない透明な笑みを浮かべていたからだった

気持ち悪い

なのははとっさにそう思った

目の前の存在が異常だ……そんな事はいくら人生経験の少ないなのはにも充分理解できた

普通の人間だったらあんなに透明な表情をできるわけが無い

「あなたは”何”なの」

なのはの口から漏れた言葉は不躰で失礼な物だった。普通だったら
誉められた物じゃないだろう

しかしなのはの問いは目の前の彼女にとってはしごく当然な問いだ
った

「私は”魔女”だよ。杖も持っていないし箒も持っていない。黒猫も連
れてないけど私は”魔女”なんだよ。水晶玉だけを持ってる”魔女
”」

目の前の彼女、”魔女”は透明な笑みを浮かべたままそう言った

「…魔女」

なのはの口から漏れた言葉に魔女は笑顔のまま頷く

「うん。ところで『傷だらけの鋼』さん。どうしてあなたはそんなに傷だらけなの？」

「私は傷ついてなんかいないよ？」

なのはは自分の体を見回してそう言う

すると魔女は笑みを一層深い物にして言った

「魂が傷だらけなんだよ。『傷だらけの鋼』さん。あなたの魂はまるで鋼のように固くしっかりしている。だけどあなたの魂はすり減っていて傷だらけなんだよ。だから『傷だらけの鋼』。それがあなたの魂の形」

背中にぞくりと何かが走った。たった数分しか経ってないのに、たった一言なのになのはは自分の全てを見透かされているような、自分の心臓を掴まれているような気分になった

魔女の問いになのはは何も答えることができなかった

「うん。ちょっと難しかったかな。まあいいや。また今度逢う時
いっぱいお話しよ。『傷だらけの鋼』さん」

すると魔女はそう言ってなのはの前から消えようとした

「待つて」

いつの間にかなのはは叫んでいた

彼女を恐いと思いながらも聞かなければいけない気がしたからだ。
おそらくそういう所が鋼と言う理由なのだろうがなのはにわかる訳
もない

「名前を教えて、魔女さん」

魔女は考えるようなそぶりをした後あの笑顔のままなのはを見ると
言った

「私は十叶 詠子。詠子って呼んでいいよ」

そう言って魔女は姿を消した

それが魔女と魔法少女の物語の始まりだった

TO BE CONTINUE

神隠しの物語、序（前書き）

短くてすいません

そして似てなくてすいません

神隠しの物語、序

近年、携帯電話の普及により携帯電話を媒介とした物語が増えている。

これらの携帯電話を媒介とする物語は主に電話が電波を受信する物であるという所から来ている

…大迫 栄一郎、「現代都市伝説考」より抜粋

高町 なのはと十叶 詠子との出会いから一晩経っていた

そしてなのはとユーノは浮かない顔をしていた。まあ所為寝不足である。

あれから二人は一睡もする事ができなかった。

目をつぶるとまるで先程までいた魔女や携帯を取った時の得体のしれない感覚が蘇って来たからである

「なのは…」

「心配ないよ、ユーノ君。私は大丈夫」

なのはは心配するユーノの声に答える

しかしなのはの声は普段と違い沈んだ声だった

「どうしたのなのは？大丈夫？」

食堂に入るといかにも元気がないなのはに桃子が声をかける

「大丈夫だよ。お母さん。少し恐い夢見ただけだから」

なのははそう言った。そして自分でその言葉をかみしめていた

なのははバスを待ちながら携帯を見ていた

ユーノに制止されたが確かめたい事があったのだ

それは着信履歴。

しかしどこを探しても昨日のあの着信は記録されてなかった。

その事実になのはは安堵した

実際電源の切れた携帯電話に着信がくる筈がないしあんなオカルトがある筈がない

そう自己完結をしたかった

昨日の事は悪い夢だったと

「…の…、なのはっ」

「っひゃ…どうしたの、アリサちゃん」

突然の声に驚きなのはは声を上げた

「どうしたの？じゃないわよ。自分の世界に入って…」

「なんかなのはちゃん恐い顔してたよ」

すずかの言葉になのははなんでもないと一言だけ言った

「それにしてもあんた携帯どうしたの？昨日はこんな傷ついてなかったじゃない」

なのははアリサの言った言葉に固まった

なのはは恐る恐る携帯の裏を見る

そこには電池パックの蓋に結構大きなひび割れが入っていた

瞬間なのはの顔から血の気が引いた

「じゃあ…夢じゃなかったの…」

なのはのつぶやきは風に消えた。

その風は腐った鉄のような香りも運んでいた

「ふふ。今回も面白い物語が見れそうだね。『影の人』達はいないけど」

そう言つて“魔女”十叶 詠子は笑う

「あなたもそう思うよね」

詠子がいる薄暗い公園のような場所に人はいない。詠子の周りには人ではない物：人のような形をしているが何かが欠けている肉塊：まるで“できそこない”のような物しかいなかった

「あなたももしかしたら“魔女”になれたかもしれないのに…受け入れられなかったのかな？かわいそう」

詠子は慈愛の笑みを浮かべながらそう言う。

肉塊は答えない

「寂しいよね。辛いよね。お母さんに会いたいよね」

詠子は笑顔のまま問いかける。

肉塊は答えない

「なら私が形を与えてあげるよ。あなたが寂しくないように」

“魔女”は笑う。楽しそうに笑う

“できそこない”は笑わない。形がないのだから

ガヤガヤ

今日も街角で“物語”は流れる

噂として…怪談として、都市伝説として

「ねえねえ、『携帯電話の着信』の噂、知ってる？」

「それはもう知ってるよ。少女が出る奴でしょ。友達が会ったって言うてた」

「なあんだ、知ってたんだ。じゃあこれは？『ありしあちゃん』ってお話？」

「ううん、それは知らないよ」

「私は先輩から聞いたんだけどね…『ありしあちゃん』ってお話は……」

TO BE CONTINUE

神隠しの物語、弐（前書き）

相変わらず原作とは違う空気が漂っています。
そしてフェイトとの出会いカットしてスイマセン。

司書様、誤字報告有難うございました

神隠しの物語、式

19XX年、〇〇県××村で二人の少年の失踪事件が発生した
県警、地域団体などが懸命に捜査したが二人は見つかる事もなくコ
ールド・ケースとして処理された

県警の発表後地元山中にて兄の方が目隠しをされ、酷く衰弱した状
態で発見された

「自分達は神隠しにあった。弟は連れて行かれてしまった」という
のが少年の証言であった

…聖祥大学オカルト研究会会誌『現代におけるオカルトの存在』よ
り抜粋

街中を金髪の少女が歩いていた。

まあ特に不思議な光景ではないが少女の表情は機嫌が良いとお世辞
にも言える物じゃなかった

少女の名はフェイト・テストロッサという

「ありがとうございますー」

少女はコンビニ弁当や携帯食料の入った袋を持つと乱雑に扉を開け
コンビニを出た

少女をここまでイライラさせているのは理由がある。

一つは彼女の…正確には彼女の母親の探し物が見つからない事

もう一つはこの街にはびこる薄気味悪い噂だった

『ありしあちゃん』

そう呼ばれる噂はあるおまじないをするとありしあちゃんが現れ
自分の願いを叶えてくれると言う物

…バカみたい

フェイトが気に食わないのはその簡単に願いが叶うという歌い文
句だった

フェイトの探しているジュエルシードなる物でも願いを叶えるには
結構な数が必要なのに

そして『ありしあ』という単語

それはフェイトにとって馴染み深い物だった

そして聞き飽きた言葉でもあった

「
…」

フェイトの声にならない叫びは誰も気づく事なく日常に飲み込まれた

高町　なのはは悩んでいた。

ジュエルシードの事、先日の方村邸での少女の事、そして『魔女』
の事

様々な事がなのはを悩ませていた

「ねえ聞いているのは！！」

「ごめん、アリスちゃん」

上の空だったなのはアリサに怒られた

しかしなのは返事は心ここにあらずだった

これにアリサは激怒していた。最近なのは元気がないのは彼女にもすずかにもすぐわかった。

なのになのは虚勢を張っている

そこがアリサにもすずかにももどかしかった。もっと自分達を頼って欲しいと思った

ピリリ、ピリリ

誰かの携帯が鳴った

ガタッ

「あっ私のだ…ってどうしたのなのはちゃん!？」

かかってきたのはすずかの携帯だった

しかし着信音を聞いた瞬間なのは顔を青くさせ立ち上がった

「なのは…あんだどうしたの？」

アリサがあまりにも異常なのは見て先ほどの怒りを完全に忘れて親友の心配をした

「大丈夫なの…うん、大丈夫。ごめんね、アリサちゃん、すずかちゃん」

「大丈夫ってあんなそんな訳ないでしょ！！ってなのは！！待ちなさい」

アリサが追いかけようとするが机が引つかかって追いかける事ができなかった。

放課後、すずかはアリサに先に帰るように言って教室に残っていた
ある事をする為である

机の上には消しゴムとハサミ、そして紙飛行機があった。

彼女がやろうとしているのは今巷で話題の『ありしあちゃん』である

すずかは新品の消しゴムをハサミで削り始めた

彼女は元来アリサとは違いあまり積極的ではない。

そのためあまり友達が多いとは言えなかった

そんな彼女に最初に話しかけてくれたのはなのはだった

そのためなのははすずかにとって何事にも代え難い大事な親友である。

シャツ、シャツ

すずかは今悩んでいるのはを見るのがつらかった

しかし自分では力になれないのを理解していた

でも何もしないのは彼女にとっても心苦しかった

シャツ、シャツ

だから彼女は『ありしあちゃん』を使ってなのはの問題の解決を願う事にした

アリサを誘ってないのはアリサにこんな事を言ったら一蹴されてしまうからである

「フウ、やっとできた」

彼女が削っていた消しゴムはいつの間にか人形になっていた

次に彼女は紙飛行機の一部を切り取って人形に巻いた

そしてその人形を持って窓から紙飛行機を投げた

「なのはちゃんの悩みが解決しますように」

そう願って

夕焼けの空はそんなすずかを見下ろしていた

To be continue

神隠しの物語、参（前書き）

テストロッサ家の人々が大変な事になっています

暗い？MISSINGとのクロスだからしょうがない

神隠しの物語、参

被害者、アリシア・テストロッサはプレシア・テストロッサ女史の実験中に不幸な事故によってアルハザードに飲み込まれたとされる。事故の原因は以前として不明であるがアリシア・テストロッサが自らアルハザードに入ったという目撃情報が有り。以上で報告を終了するものとする

時空管理局、アリシア・テストロッサの事故に対する報告書

フェイトは使い魔のアルフと共にある場所に来ていた

そこに着くやいなやフェイトはある部屋に向かった

「ああ、アリシア、早くあなたに会いたいわ…アリシア、アリシア、アリシア、アリシア、アリシア」

「…母さん、フェイトです、入ります」

フェイトは部屋の中でヒステリックに叫んでいる妙齡の女性を見て一瞬眉をひそめてから声をかけた

しかし女性の方は反応がなくてただただアルバムを見つめていた

女性の名はプレシア・テストロッサ…フェイトにとって母親にあたる人物だった

いつからだろう…母親が自分を見てくれなくなったのは…

前は例え厳しくても私の事を見てくれてはいた。暴力も愛情の裏返しだと思っていた

だけど今では私を見てすらくれない

「母さん、ジュエルシードの事なんだけど…」

フェイトがそう言うとそれまでアルバムの…しかも空のページを眺めていたプレシアはようやくフェイトの方へ顔を上げた

「…フェイト、見つかったかしら？ジュエルシード」

しかしフェイトを見る目は焦点はあっておらず心は全くフェイトを見てはいなかった

だからフェイトは…

「ごめんなさい」

見つからなかったと嘘をついた

それを聞いたプレシアは怒ることもせずただそうとだけ言って視線を下ろした

「良いわよ、フェイトが焦る必要はないは…もうすぐアリシアは見つかるから」

プレシアはただ一言そう言った

フェイトはプレシアの部屋から出ると握った拳に力を込めた

それはもう血が出そうな程に

憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い

フェイトは弱々しい声でアルフにそう言う

「見てる、見てるよ、フェイト。だから安心して」

泣きながらフェイトはアルフに抱きつく。

フェイトをアルフは愛おしそうになでていた

フェイトは落ち着くと底冷えする声で言った

「ねえ、アルフ…ジュエルシードを集めよう、絶対に」

「どっ…どうしたのさフェイト！？プレシアが望まないならフェイトがわざわざ危険を冒す必要なんか」

急に変わったフェイトに動揺しながらもアルフはフェイトを心配するように言った

「あるの。アルフ…私はね…母さんを変えた『アリシア』が憎い。だから復讐するの。ジュエルシードで母さんを元に戻すの。ジュエルシードで母さんの中の『アリシア』を…消してやる」

フェイトは冷たく笑いながらそう言った

アルフはそんなフェイトの話をただただ聞く事しかできなかった

薄暗い池のほとり…そこには“魔女”が一人立っていた

「ふふ、今度の物語も面白そうだね。」

“魔女”十叶 詠子は微笑みを浮かべながらそう言った

「あの子も願いが叶えられるといいな。『傷だらけの鋼』さんも」

詠子の手には紙を巻いた消しゴム人形

「でもちよつと難しいかな。"傷だらけの鋼"さんのおともだちが物語を知ってしまったから」

詠子は少し残念そうにそう言う

「でも私は願ってるんだよ…みんなの願いが叶う事を」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e

神隠しの物語、四（前書き）

フェイトさんファンはちょっとおすすめじづらいです

神隠しの物語、四

異界とは所為靈界のような所である
異界は我々の生活と密着して存在し、常にこちらの世界に干渉しようとしている。

都市伝説や怪談という類いの物は異界の物語を含んでいたりする

s i d e アリサ

「どうしたの？ ずずか、具合でも悪いの？」

「…なんでもないよ、アリサちゃん」

温泉に來た私達なのだがなのは上の空だしなにやらずずかの様子もおかしい

なにやら小刻みに震えているし顔色もよろしくない

なんなのよ二人して…私はそんなに頼りないの

そんな思いが爆発しそうな時、桃子さんがお風呂に誘いにやってきた

私は心の中の感情をうやむやにして桃子さんの誘いを受けた

思えばこの時に二人と真剣に話すべきだったと後悔した

私はこの時二人の話を信じたかどうかは疑問が残るけど…

それでも聞いておくべきだったんだろうな

s i d eなのは

私達が温泉を出てから私はこのまえ知り合った魔導師の女の子の使い魔さんに会った

その後みんなが眠った後に私は魔導師の女の子とジュエルシードをかけて闘うことになりました

その闘いには残念だけど負けちゃったの

それでももつと残念なこと…それは彼女の目がとても悲しいの

「待つて」

思えばそう叫んでいた

「……できるなら、私達の前にもう現れないで。次は…止められないから…それに、止まる気もない」

そう私に彼女は言います…私はその目を見て彼女が本気なのだと思います

でも…諦めたくないよ

「名前…あなたの名前は？」

「…フェイト、フェイト・テストロッサ」

「わ…私は…」

彼女、フェイトちゃんが飛んでいこうとしたので私は自分の名前を叫ぼうとしました

…ピリリ

その時私の懐から無機質な機械音が聞こえた

sideフェイト

白い魔導師から名前を聞かれて私は答えた

正直白い魔導師の事なんてどうでもいい

しかし私の悲願を邪魔するといふなら…

そこまで考えて白い魔導師を一睨みして帰ろうとすると白い魔導師から機械音のような物がした

すると白い魔導師が懐から機械、おそらくは携帯電話であろう物を取り出して固まった

「…どうして…なの、どう…してまた電話が鳴るの…」

白い魔導師は顔を蒼白にさせて電話を見ていた

息も荒い…その電話がどうしたのだろうか

「あっ…」

白い魔導師が電話を落とした

するとそれがどという訳か私の足元に震えながら転がってくる

私はつい電話を手にとった

「…出ちやダメなのっ!!」

何がここまで白い魔導師を狼狽させるんだろう

少し気になって私は通話ボタンを押した

否、押してしまった

「ふふ、こんばんは。『傷だらけの鋼』さん、『漆黒のナイフ』さん」

そう言った奴は私の後ろで立って笑っていた

私の背筋を一気に冷たい物が駆け上がった

それは隣にいるアルフも同じであろう

「……詠子さん」

白い魔導師が震えながら呟くのが聞こえた

「アンタ…何者、いや何なんだい」

アルフが私を守るように私を後ろに立った

「私？私は魔女だよ。魔法を使えないけど、空も飛べないけど」

奴はそう言った

私はゆっくりと後ろを振り向く

怖いけど、見なきゃいけない気がしたから

「フェイトっ！！見ちゃダメだ」

「っ！？」

アルフが私の視界を遮ろうとするがそれは意味もなく私の瞳は奴を捉えた

そこに居たのはアルフより幾分か若く見える少女だった

でもそんな事は私に関係はなかった

だって奴の笑みは母さんが空白のアルバムを見ている時の笑みと同じだったから

私は我慢できずアルフを押しつけて奴に飛びかかった

しかし

「うわっ、危ないな。『ダメだよそんな物振り回したら』」

私の一撃は当たる事はなかった

奴が言葉を紡いだ瞬間私のバルディッシュは空中で停止し私の手から落ちた

「ついでに『動けないよ』」

奴が更に言葉を紡ぐと私の四肢はまるで石になったように動かなくなった

「お前が…母さんを」

私は唯一動く口でそう言った

「私はあの子の願いを叶えてあげただけだよ。それと『傷だらけの鋼』さん」

「は、はい」

奴がそう言うと言い魔導師はビクツとして返事をした

「おともだちを大切にね。消えてしまわないように。私はみんなの味方だから。みんなの望みを叶えてあげたいんだよ」

そう言つて奴は消えた

「戯言を…」

私のつぶやきは誰にも届く事はなかった

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3946n/>

魔法少女リリカルなのは、魔女の物語

2011年11月17日03時00分発行